

# 広い視野を活かした判断力の育成

小 山 均

社会科 石 田 了 子

西 野 哲 之

## 1. テーマ設定にあたって

昨年度は「異学年交流授業を行う中でコミュニケーション力が高まると、社会科のテーマである問題解決のための判断力が育成されるのではないか」という仮説のもと、実践研究を行った。しかし昨年度の研究発表会社会科分科会では、社会科としてつけたい力とは何か、問題解決のために必要な視点とは何か、という意見が、出席していただいた先生方から出された。これらのご意見をもとに今年度のテーマを設定することとした。

社会科としてつけたい力とは何かについて考える際、次の文章を参考にした。「社会・国家のみならず国際社会に積極的に『参加』し、その発展に『貢献』するというグローバルな視座及び自分の住む地域や自国の社会、文化、伝統に対する理解と愛着を一層深めるというローカルな視座の両面を大切にし、いわゆる『グローバル』な視点から国際社会に生きる日本人としての自覚を育てるという新たなアプローチに加え、公民的資質の基礎を養う社会科教育の一層の充実に努めていくことがもとめられるのである。」(安野功社会科教育2006, 5月号 p.118~119) この文章を参考に、今年度、社会科としてつけたい力を、グローバルな見方とローカルな見方、両方の見方をもとに、さまざまな場面において判断・選択できる力とし、テーマを「広い視野を活かした判断力の育成」と設定した。広い視野とは、国際社会や地球規模の見方のみならず、自分の住む身近な社会に目を向けることも指していると考えます。

## 2. 異学年交流授業のねらいと位置づけ

この社会科のテーマを達成する授業の方法として、一斉授業、レポート作成時の主題設定の場面、討論など、さまざまな場面が考えられる。昨年度の本校研究の副題「コミュニケーション力を高める実践研究」のもと、社会科において異学年交流授業を行い、「下級生は上級生のレポート発表をよく観察し、資料や図の活用方法や、深い考察の仕方を学び取って」おり、「上級生は既習事項を活かして学習内容を深化させている」ことが見受けられた。これと、適切な分野・教材を組み合わせることによって、テーマに近づくことができると考える。よって、さまざまな授業の方法の中で、昨年度から行っている異学年交流授業に重点を絞り、また、「異学年交流・異校種間交流授業を通して、上級生と下級生による学びの交流が行われ、学習内容の深化、学び方の習得の促進、コミュニケーション力（自己表現力と他者理解力）の育成が期待できる。」という今年度の本校研究作業仮説にもとづき、社会科のテーマに近づきたいと考える。

## 3. これまでの研究経過

昨年度は、1年生と3年生との「レポート発表会」を取り入れた異学年交流授業、「主題図」の作成と活用方法を2年生が1年生に伝える異学年交流授業、「不景気を乗り越える政策」について、2年生と3年生とで一緒に考える異学年交流授業を行った。今年度は、1年生歴史的分野と3年生公民的分野の導入において一人ひとりが作成したレポートを発表し合う異学年交流授業を行った。いずれも上級生2人、下級生2人の合計4人グループにおいて、発表しあったり、意見を出し合う方式をとった。

### (1) グループの人数について

異学年でグループ活動を行うにあたって、グループの構成人数について考慮した。グループ構成員一人ひとりが集中して取り組むことができ、異学年間の交流がスムーズに行われ、それぞれの考えが伝わりやすいことに配慮した。グループ内で会話し、意見を出しやすい人数、そして、同学年同士でも交流に行き詰まった場合に相談しやすい人数を考え、各学年2人ずつの4人グループとした。

### (2) 異学年交流のメリット

これまでの交流授業において、上級生下級生共に見られたメリットとして、集中力や緊張感が高まったことが挙げられる。これは、グループ内においてレポートを発表しあう場面で見受けられた。

上級生において見られたメリットとして、自己表現力を高めようとする姿が見受けられた。このことについては、教師側が異学年で発表させる前に、発表の基本をおさえたり、同学年で発表練習をさせるなど、自己表現力を高めるための時間を意図的に設定した。また、上級生において見られた、もう一つのメリットとして、既習の学習内容についての深化が見られた。例えば、既習の主題図の効果的な作成・使用方法についての深化、統計資料の読み取りや表現方法についての深化が見られた。また、歴史的分野の既習事項をつかい、公民的分野の学習内容を深化させていることも見受けられた。

下級生においては、上級生のレポート、発表、意見を聞くことによって、学び方を習得していることが、授業後のふり返しシートから読み取ることができた。

### (3) 異学年交流を行う上での教師の配慮

交流授業における課題設定を行う際、上級生に対しても、下級生に対しても、やる気を出させる工夫が必要である。上級生が既習事項を使って下級生に伝えることができ、下級生はこれから学ぶことが明確となるように、焦点化した課題を教師は設定する必要がある。

共同作業や思考する場面においては、下級生が受け身となりがちである。滝充先生（国立教育政策研究所）によると、同学年同士では「黙っている子」は黙っているから意見はないと見なされる傾向にある。しかし、異学年間においては、上級生は、「下級生の黙っている子も意見を持っているが発言できない」ことを察するということである。そこで今年の異学年交流では、下級生の「黙っている子」からも、上級生が意見を引き出すことができるように、教師側からのアドバイスも行ってきた。

同じく共同作業の場面において、下級生が何をしてよいのか迷うことがあった。交流授業において上級生が「自己有用感」を獲得し、下級生が、上級生のようにになりたいという「役割へのあこがれ」を抱くため（滝先生による）には、交流授業前に教師が上級生の支持や決定が明確となるよう指導し、上級生同士の打ち合わせ、話し合いの時間を確保する必要がある。

これまで異学年交流を行ってきた感じることは（滝先生も指摘されていたが）、異学年交流授業本番前に、生徒がスムーズに交流できるように、事前のきめ細かい配慮をし、支援を行っていくことの大切さである。以上の点に留意し実践を行ってきた。

## 4. 異学年交流授業の指導計画、実践内容

実際に社会科として交流授業を行う機会になったのは5月初旬という時期であった。実は、もう少しゆっくりと準備をする時間を持ってから、交流させたかったのだが、校内の研究授業の順番の関係もあり、その時期にせざるを得なくなった。そこで、社会科としては昨年同様の校内研究授業の内容ではあるが、

1年の歴史の導入部分と3年の公民の導入部分について、実施方法については前年度の反省を生かしながら実践してみることにした。ただ、現実的には1年も3年も4月にはほとんど落ち着いた授業時間が確保できず、5月の連休明けに設定された研究授業の日までに何とかレポートを間に合わせたというのが実情であり、綿密な準備や深い考察などは不十分なまま異学年交流の当日を迎えざるをえなかった。

そうした中で授業の持って行き方として悩んだ点が、最後にどういう形で授業を終えるかである。グループ内の話はそのグループしかわからない面もあるのでグループ内の反省で終えるべきか、それとも、レポート内容に関わらず、異学年交流の反省会として全体で意見交換をして終えるべきなのか。結果としてその部分に関しては研究会の後の反省会でも話題となった部分である。

〈実践内容〉

### 1年1組, 3年3組 社会科学習指導案

平成19年5月15日(火)

第5限 3-3, 3-4教室

指導者 西野哲之

小山 均

(1) 単元名 1年 「歴史の流れ」 3年 「現代社会と私たちの生活」

(2) 目 標

(1年生)

- ・自らの関心に応じておこなった作業的な活動を通して、時代の移り変わりに気付く。
- ・中学校の歴史学習の導入として、歴史に対する興味・関心や歴史を学ぶ意欲を高める。

(3年生)

- ・高度経済成長以降のさまざまな社会的事象の学習を通して、現代社会の成り立ちを概観し、現代社会の特色に気付く。
- ・公民的分野の関心を高め、主体的な学習をおこなう。

(共通)

- ・課題設定、学習にあたり、さまざまな資料を適切に収集、選択、活用するとともに、異学年間で学習の成果を発表する機会を通して、1年生は以後の学習に役立つ技能を身に付け、3年生は自分で考え、知識を高めようとする力を身に付ける。

(3) 評価の観点及び規準

①社会的事象への関心・意欲・態度

(1年生)

- ・日本の歴史について、テーマを設定し、意欲的に学習している。

(3年生)

- ・現代社会のさまざまな事象に対し、興味・関心を高め、適切な課題を設定し、意欲的に学習している。

(共通)

- ・異学年との交流において、知識を高め、調べ学習におけるスキルを身に付けようとしている。

## ②社会的な思考・判断

(1年生)

- ・日本の歴史の流れや大きな生活の移り変わりを考察できる。

(3年生)

- ・現代の社会をさまざまな角度からとらえ、自らの社会生活と関連づけて考えるなど、国際社会における日本の役割を多面的・多角的に考察できる。

(共通)

- ・社会的事象をこれまで学習してきたことに関連させてとらえ、総合的に思考、判断することができる。

## ③資料活用の技能・表現

(1年生)

- ・課題にあった資料を収集、選択、活用するとともに、学習の成果をわかりやすく表現することができる。

(3年生)

- ・年表や資料などから、現代社会の発展と国際化の進展のあらましについて考えることができるような課題を設定することができる。

(共通)

- ・課題にあった資料を収集、選択、活用するとともに、学習の成果をわかりやすく表現することができる。

## ④社会的事象についての知識・理解

(1年生)

- ・まとめた主題から、生活の移り変わりに気付くことができる。

(3年生)

- ・高度経済成長以降の日本の発展過程を、衣食住などの生活や生活意識の変化などの身近な社会的事象と関連させて理解し、その知識を身に付けようとしている。

## (4) 指導にあたって

### 【教材観】

1, 3年生にとって、これから歴史的分野や公民的分野を学習するにあたって興味・関心を高めるために大切な単元になると思われる。また、調べ学習を進めていく中で、生徒自らが課題を見つけて、追究していく主体的な学習の足がかりとなるようにしたい。そのために、調べ学習においてよりスキルの高い3年生と1年生が交流することはお互いにとって、たいへん刺激になると考える。

### 【生徒観】

1年1組のこれまでの授業においては、人の話を聞こうとする姿勢は比較的高いものがあると思われる。1年生の各クラスでは小学校からの約束事がまだ残っており、発表する人の意見を聞くときに顔を上げて聞くことなどの様子が見られる。また、発表する人も返事をしてその場に立ち、周りの反応を見ながら意見する様子が見られる。1年生ではこのような基本的なコミュニケーションのあり方を大事にしながら授業を進めて生きていきたいと考えている。ただ、社会科におけるさまざまな判断力はどのくらいのものなのかはまだ把握しきれておらず、今回のような調べ活動や発表の様子を見て、その実態を確認し

ていかなければいけないと感じている。

3年3組の生徒は3年生という学年のわりには積極的で学習活動も活発である。意欲的に授業を盛り上げてくれる生徒も多い。しかし、一方で気をつけなければいけないこととして、活発な生徒の陰に隠れ、なかなか集中できず授業に参加できていない生徒がときに見られること、また、活発な発言が往々にして余計なおしゃべりに発展することが見られることなどが挙げられる。社会科に関してもレポート作成などの力は、個人差こそあるもののかなり上達しているものと思われる。ただし、表面的な表現の美しさはあるものの、深い考察などはまだまだ不十分で、ある課題について討論していても、何が重要な問題点なのかを認識しきれていない様子も伺える。今後はそうした考察し判断していく力の向上が重要かと思われる。

【指導観】（異学年交流について）

今年度の社会科では「広い視野を生かした判断力の育成」をテーマにした。昨年度もこの単元で異学年交流を行い、3年生は高い意識でのレポート作成し、1年生へアドバイスをすることで、自分を高めようとする場面が見られた。1年生はその3年生の作品や発表にふれることで考察の仕方や学び方を学ぶ場面となったと感じた。したがって、広い視野を生かした判断力を身につけさせるためには、発達段階の違ういろいろなタイプの刺激を受けることも大切ではないかと思い、今年度もこの単元で異学年交流をさせることにした。また、今回の交流では、どのくらいコミュニケーションを交わすことができるのかを知るため、必ず1つの発表に対して各自1つは質問するように指導してある。発表者が相手にわかりやすい発表をするということはもちろん、自分の発表がどのくらい伝わっているのかを発表者が知る場面になったり、聞き手側が伝えようとしていることを聞き取ろうと努力しようとするなどの大事な場面設定になるとと思われる。

(5) 指導計画及び評価計画（総時数7時間）

3 年 生		1 年 生	
第一次	現代社会と私たちの生活	第一次	歴史の流れ
第1時	ガイダンス	第1時	ガイダンス
第2時	テーマの設定	第2時	テーマの設定
第3時	調査活動	第3時	調査活動
第4時	まとめ活動	第4時	まとめ活動
第5時	発表の準備	第5時	発表の準備
第6時	発表（異学年交流）【本時】	第6時	発表（異学年交流）【本時】
第7時	発表の振り返り	第7時	発表の振り返り

(6) 本時の学習（第7時中の6時）

- ①単元名 ・自分の調べたレポートを発表しよう
- ②ねらい ・異学年間で学習の成果を発表する機会を設け、1年生は以後の学習に役立つ技能を身につけさせ、3年生は自分で考え、知識を高めようとする力を身につけさせる。
- ③評価の観点及び規準
  - 1) 社会的事象への関心・意欲・態度
    - ・異学年との交流において、知識を高めたり、調べ学習におけるスキルを身につけようとしているか。

## 2) 資料活用の技能・表現

・課題にあった資料を収集，選択，活用するとともに，学習の成果をわかりやす表現している。

### ④本時の展開

学習活動・内容	教師の指導・支援及び留意点	評価規準(☆)および方法(・)	時間
グループに分かれて，発表する準備をする。	評価プリントを配布し，本字の流れを説明する。 ・活動内容の確認と，発表時の約束事を確認する（組織的力量）。		2
<b>自分の作品を発表しよう！</b>			
グループに分かれて発表する。	教師側で発表と評価プリントの記入の時間を区切っていく。  (1人 発表3分ほど+評価1分 +質問4分) × 4名 =約32分	☆異学年との交流において，知識を高めようとして，調べ学習におけるスキルを身につけようとしているか。 ☆課題にあった資料を収集，選択，活用するとともに，学習の成果をわかりやすく表現している。	35
交流の感想を言ってもらおう。	発表をして，または，聞いて感じたことを出し合い，交流授業を振り返る。 ・感じたこと，これからに生かせることなどを共有していこうとする雰囲気作りをしていく（教科的力量）。	☆活動を振り返り，この後の活動に生かすことのできるスキルを確認することができる。 ・全体またはグループで感想をいってもらい確認していく。	10
作品と評価プリントを提出してもらおう。	評価プリントがしっかりと記入されているかを確認して提出する。	・評価プリントを回収して個々の生徒にアドバイスを送るようにする。	3

## 5. 異学年交流授業を実践した成果や課題

異学年交流を行っての成果としては，次の2点が挙げられる。1つは上級生にとってはよりよい作品をつくらうとする努力が見られること。2つ目に下級生にとっては上級生の活動が自分達のモデルとなるという点である。

1つ目の上級生の努力に関しては，上級生にとっては自分達の作品や発表，考え方は，下級生よりも幅が広くより深いものになってはいけなと感じるようである。そのため，今回の異学年交流で作った作品や発表の様子，考察の中身は今までの学年内で行ったものよりも完成度は高くなっている。特に，考察や感想の部分で今までよりも充実していたと思われる。また，「自分達の伝えたかったことがどの程度伝わったか」や「自分たちの発表を下級生はどう感じたのか」が気になり，下級生からの評価を知りたいとする生徒が多かった。この点から見てもよりよいものをつくらう，より良い発表を心掛けようとする様子がうかがえる。

2つ目の下級生にとってのモデルになることに関して、異学年交流後に取ったアンケートによると、「上級生の考察の深さ」、「感想の量の多さ」、「作品の見やすさ」、「資料の豊富さと分かりやすさ」、「発表のわかりやすさ」などの点で参考になったという回答が多かった。下級生は自分が苦勞した問題点や課題を上級生はどのように解決しているのかがとても気になっている様子だった。例えば、「どのような資料を持ってくると分かりやすいか」、「発表のときはどんな点に配慮すべきなのか」などといった点である。そのため、今回は上級生には事前に「作品の内容的なことよりも、スキルのなことについて下級生に話して欲しい。」ということ伝えておき、異学年交流の場に臨ませた。事前にこのような意見交換をする場面の設定をこちらが考えておくことで、「共に学ぶ」という仕掛けの1つになったと思われる。

次に、研究実践の中で明らかになった課題として、1つ目に時間割上の物理的なものが問題として挙げられる。異学年のそれも特定のクラスとクラスが同じ時間に社会科の授業を行うというのはなかなか難しいと思われる。ただ、今年度は事前に時間割の係に要望として出すことで、1週間の全ての時間とはいかないが、週1時間もしくは2時間、調整してもらうことができた。また、昨年度、広島大学教授の森敏昭先生からアドバイスいただいた中に、「1時間の授業の交流が絶対に必要なのではなく、10分でも15分でも時間の取れるときに交流を行えばいい」というものがあった。幸い本校では週1回の学級活動が全学年同じ曜日の同じ時間に設定されていることから、学活の初めの10分ほどを活用するなどして物理的な問題を穴埋めしてみた。その10分は、グループの顔合わせやアイスブレイキングなどの時間として活用した。2つ目に、学力差の問題である。昨年度も触れた点ではあるが、本来は上級生の方が下級生よりも知識やスキルの面では上であるとされる。しかしながら、課題の設定によっては逆転現象が起きることもある。今回の課題は作品の発表というものであったため、学力差の問題が生徒のレベルでは露見しにくかったと思われる。社会科の学力の定義には色々なものがあり、はっきりとはいえないが、今回のような学力差の問題が露見しにくい課題設定は異学年交流を進める上では不可欠であると思われる。昨年度の反省を踏まえて、今年度は作品の発表や主題図作り、共同作業的なテーマで異学年交流を行うこととした。しかし、この点に関しては今後更なる議論や研究が必要だと考えている。3つ目には、社会科として3年間につけさせたい力とは何かということをもう一度はっきりとさせなくてはならないという点である。昨年度から取り組んできた異学年交流ではあるが、もともとなぜ異学年交流を行うことになったのかということ、金沢大学には幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学、特別支援学校の校種が存在する。全国でも珍しい環境にある。独立法人化したあと、この特徴を生かさない手はないと、異校種間交流の話がでた。ただ、いきなり異校種での活動はそれこそ色々な壁が立ちほだかる。その前段階として学校内での異学年交流の話が持ち上がった。異学年交流での取り組みを踏まえて、将来、異校種間交流を行おうとする流れができた。この流れに沿って、社会科でも異学年交流を行ってきたわけではあるが、本来の社会科としてつけさせたい力は何であるのかという根本的な議論が後回しになってしまいかねない部分があった。中学校3年間の社会科の学習でこんな力をつけさせたい。そのためには、この単元で異学年交流を行った方がより高い成果が期待できるとする基本的な話し合いである。したがって、今年度は年度始めに3年間を見越した社会科のテーマを話し合い、つけさせたい力とは何かと言う議論を煮詰めることからスタートした。さらに、3年間のカリキュラムを見渡して、すり合わせを行い、異学年交流を行う単元を設定した。異学年交流は社会科としてのテーマに迫るための1つの方法であるということを確認しておきたい。